

平成30年7月豪雨により、農地の冠水、大量の土砂・土石の流入、表土の流亡の他、法面の崩壊、果樹棚などの施設の崩壊、農地までの道路の損壊など、甚大な被害が発生しています。早期の営農再開に向けた技術的な対応の参考にさせていただくため、とりまとめた情報をQ&Aとして共有します。なお、本Q&Aについては、今後情報の充実に努めていきます。

作目名	質問	回答	参考情報																																								
土地利用作物	<p>水稻</p> <p>水田に土砂が流入した場合の影響としてどんなことが考えられますか。</p>	<p>流入土が平坦に分布している場合、厚さ数センチであれば収穫まで生育させることは可能と考えられます。それ以上の流入土がある場合は水管理が困難になると考えられます。病害虫の発生には要注意です。稲をよく観察し、発生初期に防除を行って多発にならないようにします。発生が懸念される白葉枯病の抵抗性については、「コシヒカリ」が「中」から「やや強」、「ヒノヒカリ」は「やや弱」となっています。</p> <p>また、土砂と一緒に、雑草の種子が流入している可能性があり、雑草の発生には注意が必要です。除草剤については、水稻用の中・後期除草剤を使用することになりますが、適する薬剤は地域のJA、普及センターの指導に従ってください。除草剤に限らず農薬には収穫前日数の制限がありますので必ず守りましょう。</p>																																									
	<p>水稻に直接の被害がなくとも、用水路の被災により水が来ない地域があります。生育ステージ毎に、灌漑用水がなくとも耐えられる期間はどの程度でしょうか。また、どのように対応すべきでしょうか。</p>	<p>現地に栽培されている水稻品種は同じ品種であっても田植え時期が異なれば生育ステージが異なります。一概に述べられませんが、中干し期にあたっている品種は田面が白く乾き、葉が巻く程度までは耐えられます。それ以外の生育ステージでは灌漑用水が必要で、特に穂ばらみ期から出穂期、登熟期には特に必要です。早期移植や早生品種で生育が進み、幼穂形成期や穂ばらみ期に達している水田では、かんがい用水の早急な確保が必要です。</p>																																									
大豆	<p>播種の限界時期はいつ頃まででしょうか。またその時期の播種量はどの程度が適量でしょうか。</p>	<p>西日本で主に作付けられている「フクユタカ」や「サチユタカ」は、日長が短くなると花芽が分化するという特性があるため、播種が遅れるほど主茎の節数が少なく、主茎長が短く、分枝も少なくなります。主茎の節数と分枝が少なくなると減収します。したがって、標準的な播種時期より遅く播種する場合には、可能であれば播種量を増やす必要があります。播種時期については、8月上旬頃までが一定の収量を確保できる播種晩限と考えられます。具体的な播種時期と播種量については地域の普及センター等にご相談ください。</p>																																									
		<p>参考. 播種日と収量の目安（九州地域「フクユタカ」の場合）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>播種日</th> <th>収量kg/a（コンバイン）</th> <th>播種量 kg/10a</th> <th>備考（根拠）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>7月中旬（11～20日）</td> <td>30～27kg/a</td> <td>4～6</td> <td>過去の試験データ</td> </tr> <tr> <td>7月下旬（21～31日）</td> <td>26～23kg/a</td> <td>7～8</td> <td>過去の試験データ</td> </tr> <tr> <td>8月上旬（1～10日）</td> <td>22～19kg/a</td> <td>9～12</td> <td>過去の試験データ</td> </tr> <tr> <td>8月中旬（11～20日）</td> <td>15kg/a以下</td> <td>13kg以上</td> <td>現地事例（経験値）</td> </tr> <tr> <td>8月下旬（21～31日）</td> <td>10kg/a以下</td> <td>13kg以上</td> <td>現地事例（経験値）</td> </tr> </tbody> </table> <p>参考. 播種日と収量の目安（中国地域「サチユタカ」の場合）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>播種日</th> <th>収量対比</th> <th>播種粒数 粒/m²</th> <th>播種量 kg/10a</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>7月上旬</td> <td>100</td> <td rowspan="4">2万2千</td> <td rowspan="4">6.7～7.5</td> <td rowspan="4">岡山県現地FOEASほ場の坪刈り試験（2007、2008年）の平均値</td> </tr> <tr> <td>7月下旬</td> <td>75</td> </tr> <tr> <td>8月上旬</td> <td>68</td> </tr> <tr> <td>8月中旬</td> <td>52</td> </tr> </tbody> </table>	播種日	収量kg/a（コンバイン）	播種量 kg/10a	備考（根拠）	7月中旬（11～20日）	30～27kg/a	4～6	過去の試験データ	7月下旬（21～31日）	26～23kg/a	7～8	過去の試験データ	8月上旬（1～10日）	22～19kg/a	9～12	過去の試験データ	8月中旬（11～20日）	15kg/a以下	13kg以上	現地事例（経験値）	8月下旬（21～31日）	10kg/a以下	13kg以上	現地事例（経験値）	播種日	収量対比	播種粒数 粒/m ²	播種量 kg/10a	備考	7月上旬	100	2万2千	6.7～7.5	岡山県現地FOEASほ場の坪刈り試験（2007、2008年）の平均値	7月下旬	75	8月上旬	68	8月中旬	52	<p>農研機構技術紹介パンフレット「稲・麦・大豆2年3作体系における大麦・大豆の不耕起播種技術(中国中山間地)」 http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/files/partial_tillage_seeding_2012.pdf 農研機構技術紹介パンフレット「地下水位制御システムを利用した大豆栽培-梅雨明け後の晩播栽培- Ver.2」 http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/009600.html</p>
	播種日	収量kg/a（コンバイン）	播種量 kg/10a	備考（根拠）																																							
7月中旬（11～20日）	30～27kg/a	4～6	過去の試験データ																																								
7月下旬（21～31日）	26～23kg/a	7～8	過去の試験データ																																								
8月上旬（1～10日）	22～19kg/a	9～12	過去の試験データ																																								
8月中旬（11～20日）	15kg/a以下	13kg以上	現地事例（経験値）																																								
8月下旬（21～31日）	10kg/a以下	13kg以上	現地事例（経験値）																																								
播種日	収量対比	播種粒数 粒/m ²	播種量 kg/10a	備考																																							
7月上旬	100	2万2千	6.7～7.5	岡山県現地FOEASほ場の坪刈り試験（2007、2008年）の平均値																																							
7月下旬	75																																										
8月上旬	68																																										
8月中旬	52																																										
<p>晩播栽培大豆について、雑草の発生や収量低減を抑制できる栽培方法はありますか。</p>	<p>7月中下旬播種の晩播栽培では、栽植密度を15～20本/m²確保すれば収量低下が抑えられ、さらに、密条播にすることで、コンバインの刈り残し損失を軽減し、雑草の発生を抑えることができます。</p>	<p>山口農総セ成果情報「晩播栽培ダイズ「サチユタカ」のコンバイン収穫に適した栽植密度、栽植様式」 https://www.naro.affrc.go.jp/org/warc/research_results/h20/01_sakumotu/p8/index.html</p>																																									
<p>土砂が流入したほ場に作付ける場合、どのような留意点がありますか。</p>	<p>流入した土砂に作業に支障が生じる岩石や礫等が混ざってなく、厚さ数cm以下で平坦に分布していればそのまま播種が可能と考えられます。ただし、流入土砂の種類によっては、土壌pHや肥沃度が大豆作に適さない条件となっている可能性も考えられるので、状況に応じて、土壌改良剤や肥料を施用する必要があります。具体的な対応については地域の普及センター等にご確認ください。</p>																																										

		土砂が流入したほ場における、病虫害及び雑草防除等の留意点はありますか。	栽培暦、防除基準に従って適正に防除を行う必要があります。流入土に紛れて、アサガオ類、ホオズキ類、ツユクサ等の難防除雑草の種子が流入している可能性もあるので、雑草の発生には注意して観察を行い、発生を確認したらできるだけ早く防除する必要があります。また、明渠等が崩れている可能性が高いので、排水対策を徹底する必要があります。	
果樹	共通	樹が水没した場合どのような影響が考えられますか。	水没した部分の葉や果実は腐敗し、落葉、落果する可能性が高いため、まず摘果した後に摘葉します。軽症とみられる場合は、すぐに殺菌剤で対応します。	
		水害により園内の土壌が流され、根が露出していますが、どのような対応がありますか。	根が露出している状況では、なるべく早く客土を行い根の乾燥を防ぐことが重要です。応急的には、シートやマルチで覆って根の乾燥を防ぎます。倒伏した樹がある場合は、早期に引き起こし、支柱等に固定します。	
		崩壊した法面は、どのように対処するのが良いでしょうか。	崩壊した石垣や法面は、崩壊が進行して二次被害が発生しないように土のうを積んで補強する必要があります。	
		流入した土砂の性質により、樹体への影響は違いますか。	通気性や排水性の良い砂質土、礫が流入した場合、厚さ数センチ程度であれば樹体への影響は少ないと考えられます。粘土質の土壌が堆積して土壌の通気性が悪くなっている場合は、樹体への影響が懸念されます。 樹幹下に、エンジン式穴開け機やハンドディガーで、もとの地表面から深さ30cm程度の穴を多数開け、穴の深さに合わせてネトロンパイプを切って差し込み、穴が壊れないようにします。穴を通じて空気が入りますので、根の酸欠を防ぐことができます。	
		枝が折れたり樹が倒伏した場合はどうしたらよいですか。	枝折れした場合は切り戻しを行い、切断面にトップジンMペースト等の癒合剤を塗布します。軽い股裂けの場合は、ひも等で結束して傷口に癒合剤を塗布し、樹勢回復を図ります。樹が倒伏した場合は、可能な限り根を痛めないように樹を起こし、根元に土を寄せます。状況によっては引き起こしはせずに、傾いたまま、主枝の更新で対応します。	
		樹勢低下がある場合に対処する方法がありますか。	地下部の環境が悪化していると思われます。地下部が弱っているときには地上部と地下部のバランスが悪くなっているため、地上部の枝を適度に切除し、摘果によって着果負担を少なくします。その後、葉色が薄いようであれば、窒素成分（尿素0.2～0.5%など）を含む液肥の葉面散布を行います。なお、樹種や生育ステージ等により散布濃度を変える必要がありますので、地域の普及センター等にご相談ください。	
		豪雨後、葉が巻いて樹体が乾いているような状況がみられるが、対応方法はありますか。	葉が巻いているのは、根の吸水能、枝の通水機能が低下して葉の蒸散に対して水の供給が不足しているためと考えられます。軽度の場合、雨がやんだ2、3日後には回復しますが、もし回復しない場合は、樹の過剰な乾燥を防ぐために傷んだ枝を中心に剪定・除去して蒸散を抑制するとともに、摘果により着果量を調節する必要があります。	
カンキツ ※共通欄も参照のこと	園地が浸水した場合どのような影響が考えられますか。	湛水すると根が損傷するため、葉の萎凋、落葉、樹勢低下等が発生します。程度に応じて、摘果し着果負担を軽くする必要があります（場合によっては全摘果も検討）。冬季の剪定は、樹体の回復状況により剪定量を判断します。 カンキツでは、園地の排水性が悪く、水が滞留すると、褐色腐敗病やすそ腐れ病の発生の危険度が高まります。かいはよう病や黒点病の防除とあわせて適切な殺菌剤散布を行います。		
	カンキツで、樹勢低下がある場合に対処する方法がありますか。	樹種共通欄で示した回答に加えて、カンキツでは、着果量を少なくし、夏秋梢の発生を促す必要があります。少なくとも樹冠上部、枝先などの果実は落とし、必要であれば全摘果も検討します。		
	どのような病気の被害が心配されますか。	かいはよう病や黒点病の多発が懸念されます。さらなる発病を防ぐために、かいはよう病では、伝染源となる発病葉・発病枝・発病果実を除去するとともに、発病を助長するミカンハモグリガの防除を徹底します。黒点病では、伝染源となる枯枝を剪除するとともに園外へ持ち出して処分します。園内の枯木や切株も伝染源となるため適宜除去してください。いずれの病害に対しても、降雨が予想される場合は事前に殺菌剤を散布する必要があります。 苗疫病は集中豪雨により発生が助長されますので、発生を認めたら直ちに殺菌剤を散布します。すそ腐病が発生した場合は、発病部をナイフで削り取り、癒合剤を処理します。		

	殺虫剤を散布できない場合、どのような害虫の被害が心配されますか。	カンキツで殺虫剤が散布できない場合、カメムシ類の被害が発生する恐れがあります。特に2018年はカンキツ生産地域で夏以降の多発が予想されるので、防除を行わないと大きな被害になる可能性があります。8月後半以降はミカンハダニの密度が高まるので、合わせて注意が必要です。なお、これらの防除ができない場合、上記の害虫の他に夏秋梢のミカンハモグリガやヤガ類など他のチョウ目害虫の被害が増えることも予想されます。	
	今後、高温と乾燥が続いた場合、どのような影響が考えられますか。	根元が傷み十分に吸水できない状態であれば、干害の発生が懸念されます。樹冠上部や枝先部の枯れ症状の発生や葉肉崩壊症、ホウ素欠乏症などの発生に注意が必要です。葉色が淡くなり落葉する場合、可能であれば100L/樹を目安にかん水します。	
モモ ※共通欄も参照のこと	園地が浸水した場合どのような影響が考えられますか。	湛水すると根が損傷するため、葉の萎凋、落葉、樹勢低下等が発生します。程度に応じて、摘果し、着果負担を軽くする必要があります（場合によっては全摘果も検討）。冬季の剪定は、樹体の回復状況により剪定量を判断します。	
	どのような病気の被害が心配されますか。	せん孔細菌病は梅雨時期の降雨量が多いと果実が多発するため、抗生物質剤などを病害虫防除基準に準拠して散布します。また、来年の発生が多くなることも懸念されるため、収穫後には銅剤等の散布を複数回行うようにします。灰星病は収穫前20日前後に雨が多くと多発するため、病害虫防除基準に準拠して殺菌剤を散布します。	
	殺虫剤を散布できない場合、どのような害虫の被害が心配されますか。	夏季以降、モモで殺虫剤散布を行わなかった場合に注意すべき害虫として、シンクイムシ類とハモグリガが挙げられます。いずれもこれまでの防除により密度が低く保たれていれば、今年に関しては今後殺虫剤無散布でも収穫できる可能性があります。その場合害虫の密度が高くなることから、次年度に防除対策が必要になります。	
	今後、高温と乾燥が続いた場合、どのような影響が考えられますか。	湛水等により根が被害を受けていると、土壌が乾燥した時に樹が水ストレスを受けやすくなるので、早めのかん水等で対応する必要があります。また根が傷んで落葉した場合は、果実が日焼けを受けやすくなります。甚だしく落葉した場合は、主幹、垂主枝の日焼けが発生しやすくなるので、白塗剤を塗布するか、資材を巻くなどの対応が必要となります。	
ブドウ ※共通欄も参照のこと	園地が浸水した場合どのような影響が考えられますか。	湛水すると根が損傷するため、葉の萎凋、落葉、樹勢低下等が発生します。程度に応じて、摘果し、着果負担を軽くする必要があります（場合によっては全摘果も検討）。冬季の剪定は、樹体の回復状況により剪定量を判断します。	
	園地に土砂が流入して埋まっていますが、どうしたら良いですか。	台木部分まで土砂で埋没した状態をそのままにしていると、穂品種から根が発生することになります。特にブドウでは、フィロキセラ（ブドウネアブラムシ）抵抗性台木が利用されており、穂品種から根が出るとフィロキセラの被害を受けるため、年内までに主幹元の土砂の除去が必要です。	
	どのような病気の被害が心配されますか？	ブドウでは降雨が続くとべと病が多発する恐れがあります。対策として、園内の排水を改善するとともに伝染源となる病落葉の処理を徹底します。薬剤防除は病害虫防除基準に準拠して雨の合間に実施します。	
	ブドウで殺虫剤の散布ができないとどのような害虫の被害が心配されますか。	緑色系ブドウ（シャインマスカットなど）の場合、袋かけができていれば収穫できる可能性があります。袋かけが未実施の場合、防除を行わないとチャノキイロアザミウマやその他害虫の被害を受け、収穫は難しいと思われれます。 着色系ブドウ（巨峰など）についても同様ですが、無袋の場合でも、チャノキイロアザミウマの被害が目立たない状態であれば収穫は多少できるものと思われれます。 クビアカスカシバ、ブドウトラカミキリ、ブドウスカシバなどの枝幹害虫対策を今年行えない場合、次年度以降防除を行わないと被害を受ける可能性があります。	
	今後、高温と乾燥が続いた場合、どのような影響が考えられますか。	果粒肥大期に乾燥が続いた場合、果粒肥大が抑制されたり、水まわり期までは縮果症が発生しやすくなります。このため、十分なかん水を継続します。かん水量が十分にできない場合は、敷きわらやマルチ被覆により土壌水分の保持に努めます。裂果しやすい品種は、水まわり期以降、急激なかん水は避けて、こまめなかん水を心がけます。	

ナシ ※共通欄も参照のこと	園地が浸水した場合どのような影響が考えられますか。	湛水すると根が損傷するため、葉の萎凋、落葉、樹勢低下等が発生します。程度に応じて、摘果し、着果負担を軽くする必要があります（場合によっては全摘果も検討）。冬季の剪定は、樹体の回復状況により剪定量を判断します。	
	どのような病気の被害が心配されますか？	「幸水」や「豊水」では黒星病の多発生が懸念されます。黒星病は、夏場の発病に対しては心配する必要はありませんが、十分な防除ができないと秋期に発生が多くなる可能性が高くなります。この場合、病原菌の越冬量を少なくするため、収穫後の防除が重要となります。落葉は園内に放置せず、ロータリー耕で土中にすき込むなどして処分する必要があります。その他、輪紋病の発生や、「二十世紀」では黒斑病の発生に注意が必要です。	
	水害発生後にナシの殺虫剤が撒けない場合に、どのような害虫の被害が心配されますか。	ナシで殺虫剤散布を行わなかった場合に注意すべき害虫として、シンクイムシ類とカメムシ類、ハダニ類が挙げられます。シンクイムシ類については、これまでの防除により密度が低く保たれていれば、今年に関しては今後殺虫剤無散布でも収穫できる可能性があります。その場合害虫の密度が高くなることから、次年度にシンクイムシ類の防除対策が必要となります。 カメムシ類についても、これまでの防除により密度が低く保たれていれば、問題にならない可能性があります。また、カメムシ等の防除のために残効性の長い薬剤を使用すると、殺虫剤によってはハダニの多発生を招く場合があるので注意が必要です。 梅雨明け以降は例年ハダニの密度が高まるので、合わせて注意が必要です。なお、防除ができない場合、上記害虫の他に「ケムシ類」の発生が増えることも予想されます。	
	収穫期に殺虫剤を散布できない場合、次年度に向けた防除での注意点はありますか。	収穫期の防除ができないと、シンクイムシ類の越冬繭が多くなることが予想されます。春先の早めの徹底防除が必要となります。また、ハダニも同様に夏から秋の防除ができない場合は越冬量が増加するので、越冬期防除（冬マシン）が重要となります。	
	今後、高温と乾燥が続いた場合、どのような影響が考えられますか。	高温乾燥は「新高」のみつ症、「あきづき」、「王秋」のコルク状障害の発生を助長し、根域環境が悪化した状態では、それらの果肉障害をさらに助長する可能性があります。これらの障害の発生を抑制するためには、適切なかん水が必要となります。	
カキ ※共通欄も参照のこと	園地が浸水した場合どのような影響が考えられますか。	カキは、耐水性の強い果樹に分類されていますが、湛水状態が続くと根腐れになり落葉や落果が発生します。また、落果しなかった果実もヘタスキ果になりやすくなります。浸水した園および排水不良地（地下水位が高まった園地）では、早急に排水して根腐れを防止する必要があります。	
	心配される主要な病害に対する対策は。	7月上旬はカキ炭疽病、落葉病の防除時期にあたります。特に落葉病は、適切な防除が必要であり、8月以降に防除を行っても有効性は低く、多発は免れない可能性があります。多発した場合は、冬期に落葉処理を徹底して、翌年の伝染源を減らす必要があります。 炭そ病は、今後8月下旬から9月中下旬の重点防除時期に丁寧な防除が必要です。発病果は落果したものを含め地中深く埋めて下さい。	
	心配される主要な害虫に対する対策は。	カキで殺虫剤が散布できない場合、カメムシ類の被害が発生する恐れがあります。特に多発時には防除を行わないと大きな被害になる可能性があります。また、8月初めはカキノヘタムシガの防除時期です。これまでの防除により密度が低い場合、今年度の防除を省いても大きな被害にならない場合もあります。ただし、今年防除できなかった場合、カキノヘタムシガの密度が高くなると予測されるので、次年度以降はしっかりと防除を行う必要があります。	
	今後、高温と乾燥が続いた場合、どのような影響が考えられますか。	湛水等により根が被害を受けていると、土壌が乾燥した時に樹が水ストレスを受けやすくなるので、早めのかん水等に対応する必要があります。また根が傷んで落葉した場合は、果実が日焼けを受けやすくなります。これから仕上げ摘果を行う場合は、樹冠内部の果実を残すなどの対応が考えられます。甚だしく落葉した場合は、主幹、亜主枝の日焼けが発生しやすくなるので、白塗剤を塗布するか、資材を巻くなどの対応が必要となります。	

		摘果などの管理ができない場合どのような影響がありますか。	摘果不足となった場合、果実の小玉化などにつながり、商品化率が低下します。葉のい凋、葉色の低下、落葉が激しい樹の場合、摘果できないと樹勢低下を招きます。	
野菜・花き類	共通	土砂流入が土壌（作土）に与える影響と対処方法はありますか。	堆積土砂のpHの分析が必要です（pH5～7が適正值）。上記の範囲内で作土とほぼ同様のpHであり、流入量が数cmと少なれば影響は小さいと考えられます。具体的な対応については地域の普及センター等にご確認ください。	
		事後の肥培管理で注意することはありますか。	湿害を受けた畑では根からの肥料吸収が悪くなるため、植物の様子を見ながら、適正量の追肥や場合によっては液肥の葉面散布によって生育の回復を図ります。	
		多雨後あるいは浸水または冠水した場合に病害防除で注意することはありますか。	水媒伝染病害の多発が懸念されます。そのため、損傷した茎葉を適切に切除・処分し、適切な薬剤散布等によって病害の発生抑制に努めます。	
		ほ場が冠水した場合の事後対策を教えてください。	冠水により、土壌の流入や肥料の流失が生じて土壌の性質が大きく変わっている場合もあります。そのため、土壌の水分状態が回復したら、土壌pH等の分析後、その結果に基づき施肥等を行います。	
		施設内に浸水した場合の事後対策を教えてください。	施設の排水、換気を図って土壌の乾燥と施設内の湿度低減を図ります。傷んだ作物は廃棄し、施設の清掃を行います。 販売店等に点検をしてもらう等を行ったうえで、補修や修理が必要な場合には適切に処置します。特に暖房機、電気設備等の機器は安全に運転可能な状態であるかどうかを十分に確認します。	
		病気や害虫が発生しました。薬剤散布で注意することはありますか。	高温時には農薬の薬害が出やすいことがあるので、高濃度で散布する際には注意が必要です。涼しい時間帯に薬剤散布するのが望ましいですが、朝露などで濡れている時に散布すると薬害がでる薬剤もありますので、説明書をよく読んで使用して下さい。	
		ハウレンソウ	ほ場が冠水しましたが、肥培管理で注意することはありますか。	ハウレンソウは酸性土壌に弱くpH6.5～7.0が適正です。ほ場外から土壌が流入した場合には土壌pHが適正な水準にあるか確認する必要があります。pH5.0位まで下がると生育が著しく悪くなります。石灰資材等により適切にpHを矯正します。
	ほ場が冠水しましたが、病虫害等に注意することはありますか。	ハウレンソウは湿害に弱く、水に浸かると病害発生の危険性を助長します。特に、水の中を泳ぐ遊走子で広がるピシウム菌による立枯病（たちがれびょう）、傷んだ根から進入しやすいフザリウム菌による萎凋病（いちょうびょう）などの土壌病害には注意が必要です。卵菌類であるピシウム菌による立ち枯れ病には、リドミル等の卵菌類に効果のある薬剤を、水が引き次第、散布することが推奨されます。 また、ハウスでは、すそ部分の土が流されて隙間ができていないか確認して下さい。隙間があると害虫・害獣が侵入する恐れがあります。		
ニラ	ほ場の定植準備が遅れて苗が大きくなってしまいました。	定植苗の長さは20～25cmくらいが適切です。苗が大きくなった場合は葉先を切って定植します。		
	ほ場が冠水しましたが、肥培管理で注意することはありますか。	ニラの場合、望ましいpHは6.0-6.5程度です。ほ場外から土壌が流入した場合には土壌pHが適正な水準にあるか確認する必要があります。石灰資材等により適切にpHを矯正します。		
	ほ場が冠水した場合の病害対策について教えてください。	豪雨の後には、軟腐病や葉腐病の多発が懸念されます。そのため、ほ場観察による早期発見と薬剤散布による初期防除に努めます。		
ミョウガ	多雨後の病害対策について教えてください。	ほ場の水はけが悪化した場合、根茎腐敗病による根腐れや葉枯病による葉枯れが生じることがあります。特に根茎腐敗病が発生すると株が枯死してほ場全体で収穫不能となる危険性があります。遮光資材でほ場を被覆し発生抑制し、発病が見られたら発病株とその周辺株数株をできるだけ早く除去してほ場で適切に処分します。また、発病ほ場で使用した農機具は洗浄し、他のほ場に土等を持ち込まないようにします。		
青ねぎ	土砂流入で深植え状態になった場合の栽培管理はありますか。	青ねぎは、葉鞘部(数cm)が土砂に埋まった程度では問題なく育ちます。しかし、それ以上に埋まると生育は不良になります。また、深植え状態では白色部分が長くなり、青ねぎとしての商品性が下がります。加湿にならないための対策としては、作土層が厚くなった分、通常栽培より少なめの灌水にします。		

		<p>渇水に対応して水のやり方に注意することはありますか。</p>	<p>盛夏期の栽培では、生育初期には多頻度で灌水を行い、その後、生育を見ながら少しずつ灌水量を減らします。乾燥しすぎると葉先枯れなどが発生し、商品性が著しく劣ります。ネギの根は浅いところに分布するため細やかな灌水管理が必要となります。まずは、水の確保が必要です。</p>	
	果菜類	<p>果菜類の事後対策で注意することはありますか。</p>	<p>損傷の著しい茎葉や果実は取り除き、薬剤散布によって病害防除します。根が傷んでいることがありますので、摘果により着果負担を軽減してやると草勢の回復が早まります。株元の土壌が硬く締まっているようなら、植物体を傷めないように注意しつつ通気性をよくするため軽く中耕することも効果があります。</p>	
	葉菜類	<p>葉菜類の事後対策で注意することはありますか。</p>	<p>損傷が激しい株は除去します。生育初期で被害がひどい場合は再播種を検討します。殺菌剤で病害防除します。土が硬く締まっているようなら軽く中耕します。</p>	
	花き類	<p>冠水したほ場の病害対策について教えてください。</p>	<p>多雨、冠水による植物の弱りや痛みによって病害の多発が予想されますので、ほ場の観察により初期防除を徹底します。</p> <p>軟腐病や青枯病、ピシウム菌やフザリウム菌による立枯病、疫病による被害が予想されるため、適切に防除を行います。</p>	
その他	土壌	<p>「真砂（マサ）土」とはどんなものですか。また、真砂土が流入した場合どのような影響が考えられますか。</p>	<p>花崗岩が風化してできた花崗岩質土壌のことで、一般に、粗粒質で透水性が良いが、養分に乏しい土です。保肥力を示す陽イオン交換容量（CEC）が小さいため緩衝能が小さく、pHが変化しやすい特徴があります。そのため、作土への混入割合が大きくなると、土壌の性質や作物に影響すると考えられます。</p>	
		<p>粘土質な土壌が流入した場合どのような影響が考えられますか。</p>	<p>粘土質の土壌は、保水力や保肥力に優れますが、透水性が不良になり、過湿状態になりやすくなります。そのため作土への混入割合が大きくなると、土壌や作物に影響すると考えられます。</p>	
	作業機械	<p>浸水した農業機械の取り扱いについて教えてください。</p>	<p>エンジンが破損する恐れがあるので、農機販売整備業者等に点検してもらった上で、スイッチを入れて下さい。また、漏電や火災の危険があるので、点検を受けるまでの間、バッテリーの端子を外して下さい。</p>	